

二〇一六年八月五日

戦争のなき世となれと祈る盆
月下美人帰宅の夫に開きけり

たか子
うつぎ

二〇一六年八月四日

松籟に和する波音いと涼し
母と娘の心置きなき避暑散歩
潮遠く引きたる沖に土用波
遠泳の波間に見ゆる島遠し

ひかり
なおこ
よし女
智恵子

二〇一六年八月三日

夜濯ぎのゴルフズボンに塩の飴
朝蟬の鳴き出す迄の庭仕事
外つ国の言葉もまじる納涼船
裏側へ回る道あり滝涼し
かなかなの山に訝す里帰り
竹林の一隅にあふ女郎花

なつき
うつぎ
豆狸
ともえ
まゆ
ぼんこ

二〇一六年八月二日

畑の幸抱かえて戻る麦藁帽
夏野菜見目よきものはよそ様へ
遠雷や風雲急を告ぐる雲
夏落葉訪ふ人もなき行宮址

よし女
明日香
まゆ
菜々

二〇一六年八月一日

暑に耐ふる水分補給怠らず
デパ地下の試食めぐりし暑に耐ふる
新涼の信濃の旅の空まさお
蝉しぐれ耳朵豊かなる布袋尊

三刀
なおこ
たか子
菜々

二〇一六年七月三十一日

野に佇てば蜻蛉に包囲されてをり
大夕立町モノクロに一変す
万緑を貫く千本鳥居かな

まゆ
菜々
ひかり

二〇一六年七月三〇日

魚の香の漂ふ港揚花火
一太刀に背なの裂けたる蝉の殻

まゆ
ぼんこ

毎日句会みのる選・二〇一六年八月七日